

Oracle Fail Safe for Windows NT and Windows 2000

リリース・ノート

リリース 3.1.2

2001年7月

部品番号: J04372-01

注意: ドキュメントに記載されている Oracle Applications 11*i* は、Oracle E-Business Suite 11*i* の旧製品名称です。

ORACLE[®]

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。JInitiator、Oracle7、Oracle8 および Oracle8*i* は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

Copyright © 2001, Oracle Corporation
All Right Reserved

目次

第 1 章 このリリースでの新機能	5
第 2 章 ソフトウェアの互換性	6
Windows NT にインストールした場合の Oracle Fail Safe の互換性	6
Windows 2000 にインストールした場合の Oracle Fail Safe の互換性	7
第 3 章 インストールおよび製品の削除	9
Oracle Fail Safe 3.0.3 および 3.0.4 の削除失敗に対する回避策	9
Oracle Fail Safe 2.1.3 から Oracle Fail Safe 3.1.2 にアップグレードした後の 2 回の再起動	9
MSCS クラスタ アドミニストレータでのフェイルセーフ・リソース・タイプの問題	9
「クラスタの検証」コマンドによる、Oracle リソース DLL 登録の自動検証	10
サイレント・インストールでの大/小文字区別	10
Oracle Fail Safe クライアントおよびサーバーのリリースの一致	11
Oracle Fail Safe Server のインストール時の Windows NT イベント ビューアの 稼働の禁止	11
第 4 章 Oracle Fail Safe Server	12
Oracle Fail Safe Server と Microsoft Cluster Server は異なるアカウントの元で 実行可能	12
リソースをグループに追加するときの動作の変更	12
Oracle Fail Safe リリース 2.1.x から Oracle Fail Safe リリース 3.1.2 へのアップグレー ドで作成される、2 つの Fail Safe Server のリソース (Oracle Fail Safe)	13
第 5 章 Oracle Fail Safe Manager	14
Windows 2000 で稼働する場合、Oracle Fail Safe Manager ではユーザー名 およびパスワードが必要	14
FSCMD OFFLINERESOURCE コマンドの変更	14
第 6 章 Oracle データベース	15
Oracle Fail Safe では INTERNAL アカウントのパスワードは不必要	15
スタンドアロン Oracle8i データベースの検出	15
Fail Safe Manager で発生する可能性のある Oracle8i データベース・エントリの エラー	15

サンプル・データベースの作成	15
アーカイブ・ログのサポート	16
スタンバイ・サポート	17
データベース・リスナー・リソースとデータベース・リソースの依存性の変更	17
listener.log ファイルが肥大化する問題	17
検証操作時に無条件に再起動しないスタンドアロン・データベース・リソース	18
データベース・ユーザー名に INTERNAL を使用	18
第 7 章 Oracle Reports	19
一貫性のない NAMES.DEFAULT_DOMAIN パラメータによる Oracle Reports Server での障害の可能性	19
Oracle Reports Server を含むグループの検証時の不適切なメッセージ	19
第 8 章 Oracle Load Balancer Server	20
Oracle Load Balancer Server リソースを追加した後の FormsWeb.cfg ファイルの 妥当性チェック	20
第 9 章 Oracle HTTP Server	21
ドキュメント・ルート・ディレクトリへのファイルのコピー	21
第 10 章 Oracle MTS Service	22
グループへの Oracle MTS の追加操作の失敗	22
第 11 章 Oracle Applications 11i Concurrent Manager	23
Vision Demonstration Database	23
第 12 章 ディスク・リソース	24
第 13 章 クライアントとアプリケーション	25
Oracle Server 8.1.6 の透過的アプリケーション・フェイルオーバーでの問題	25
Oracle8 OCI TAF 機能と 8.0.5.2 以前のリリースの Oracle	25
第 14 章 Oracle Enterprise Manager との統合	26
Oracle Intelligent Agent 8.1.7 での仮想ホストの検出	26
サポートされる Oracle Intelligent Agent	26
JobOut サブディレクトリの部分的サポート	26
物理ノード上でスタンドアロン・データベースとして検出されるフェイルセーフ・ データベース	27
Fail Safe によって再起動されない物理ノードのデフォルト・エージェント	27

第 15 章	マニュアルのエラー	28
	Oracle Fail Safe 概要および管理ガイド	28
	Oracle Fail Safe クイック・ツアー	28
第 16 章	廃止された機能	29
第 17 章	修正されたソフトウェアの問題	30

第 1 章 このリリースでの新機能

Oracle Fail Safe は、完全なインターネット・ビジネス・ソリューションに Microsoft クラスタでの高可用性を提供します。このリリースの Oracle Fail Safe には、次の新機能が用意されています。

- 高可用性を実現するための Oracle Service for Microsoft Transaction Server (MTS)の構成のサポート。(マニュアルでは Oracle Service for MTS は Oracle MTS Service と記述されています。)
- Oracle Fail Safe が高可用性データベースのオンライン化を試行時に、発生するエラーに対する、エラー処理スクリプトのサポート。
- Windows オペレーティング・システム認証 (OS 認証) によるデータベース認証のサポート。
- Oracle iAS リリース 1.0.1 のサポート。(ただし、Oracle8i Cache を除く)

第 2 章 ソフトウェアの互換性

この項では、Oracle Fail Safe を Windows NT または Windows 2000 にインストールした場合に互換性のあるソフトウェアについて説明します。

Oracle Fail Safe リリース 3.1.2 と Oracle Application Server との互換性は、日本ではサポートしていません。

Windows NT にインストールした場合の Oracle Fail Safe の互換性

このリリースの Oracle Fail Safe は、Oracle Fail Safe Server を Microsoft Windows NT Enterprise Edition 4.0 (Service Pack 3、4、5 または 6a) にインストールし、Oracle Fail Safe Manager を次のいずれかにインストールした場合に、次の表に示すソフトウェアと互換性があります。

- Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack 3、4、5 または 6a)
- Windows 95 OEM SR2
- Windows 98
- Windows 2000

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Microsoft Cluster Server (MSCS)	Version 1.0 Build 224
Oracle データベース・サーバー	Oracle 7.3.4
	Oracle 8.0.6
	Oracle 8.1.5
	Oracle 8.1.6
	Oracle 8.1.7
Oracle Service for Microsoft Transaction Server ¹	Oracle 8.1.7
Oracle Enterprise Manager	リリース 2.0.4
	リリース 2.1
	リリース 2.2
Oracle Forms Load Balancer Server	リリース 6.0.6.1.0 以降

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Oracle Forms Server 6i ²	リリース 6.0.8.7.3 以降
Oracle Reports Server 6i	リリース 6.0.8.8.3 以降
Oracle Applications 11i	リリース 11.5.1 リリース 11.5.2
Oracle HTTP Server	リリース 1.3.9 リリース 1.3.12
Oracle WebDB	リリース 2.1 リリース 2.2 リリース 2.5
Oracle Intelligent Agent	リリース 8.1.7
Oracle iAS	リリース 1.0.1 (Oracle8i Cache を除く) リリース 1.0.2 (Cache コンポ - ネットを除く)

- 1) Oracle Service for MTS は Oracle データベース・サーバーとともにインストールされます。
- 2) Web 上で Oracle Forms を表示する場合、Jinitiator リリース 1.1.7.15.1 以降の使用をお勧めします。

Windows 2000 にインストールした場合の Oracle Fail Safe の互換性

このリリースの Oracle Fail Safe は、Oracle Fail Safe Server を Microsoft Windows 2000 Advanced Server または Data Center Server にインストールし、Oracle Fail Safe Manager を次のいずれかにインストールした場合に、次の表に示すソフトウェアと互換性があります。

- Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack 3、4、5 または 6)
- Windows 95 OEM SR2
- Windows 98
- Windows 2000

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Microsoft Cluster Server (MSCS)	Version 5.0
Oracle データベース・サーバー	Oracle 8.1.6 Oracle 8.1.7

ソフトウェア	リリースまたはバージョン
Oracle Service for Microsoft Transaction Server ¹	Oracle 8.1.7
Oracle Enterprise Manager	リリース 2.1
	リリース 2.2
Oracle iAS	リリース 1.0.2 (Cache コンポーネントを除く)
Oracle Applications 11i	リリース 11.5.2
Oracle Intelligent Agent	リリース 8.1.7

1) Oracle Service for MTS は Oracle データベース・サーバーとともにインストールされます。

第 3 章 インストールおよび製品の削除

この項では、Oracle Fail Safe のインストールについて説明します。

インストールおよび製品の削除方法についての詳細は、『Oracle Fail Safe インストレーション・ガイド』を参照してください。

Oracle Fail Safe 3.0.3 および 3.0.4 の削除失敗に対する回避策

Oracle Fail Safe 3.0.3 または 3.0.4 からアップグレードまたは製品の削除中、インストールまたは削除が完了する前にインストーラが終了してしまった場合、次のようにしてください。

1. クラスタ アドミニストレータで Oracle Fail Safe Server を停止します。すべてのクラスタ・ノードで Oracle Fail Safe Server が停止されていることを確認してください。
2. Oracle Fail Safe コンポーネント・ファイルを Oracle インストーラ・ディレクトリ（たとえば、C:\Program Files\Oracle\Inventory\Components）から削除します。oracle.failSAFE で始まるファイルのみを削除してください。

Oracle Fail Safe 2.1.3 から Oracle Fail Safe 3.1.2 にアップグレードした後の 2 回の再起動

インストールが完了した後で、Oracle Fail Safe 3.1.2 インストーラは、システムを再起動するように指示します。この再起動によって、システム・パスが Oracle Fail Safe 3.1.2 ディレクトリを含むように更新されます。Oracle Fail Safe リリース 2.1.3 からアップグレードする場合は、最初の再起動の後に Oracle Fail Safe Manager で「クラスタの検証」を実行して、Oracle Fail Safe データベース・リソース DLL を更新する必要があります。次に、各クラスタ・ノードをもう一度再起動し、クラスタ・サービスが新しいリソース DLL を取り出せるようにします。

MSCS クラスタ アドミニストレータでのフェイルセーフ・リソース・タイプの問題

Oracle Fail Safe のインストールの完了後、MSCS クラスタ アドミニストレータでフェイルセーフ・リソース・タイプ（データベースなど）に問題が表示される場合があります。MSCS クラスタ アドミニストレータでは、そのリソース・タイプ名の上に赤でオースラッシュ(∅)記号を表示して、問題が発生したことを示します。

この問題が発生した場合、次のようにしてください。

1. Oracle Fail Safe のインストール後にクラスタ・ノードを再起動しなかった場合は、再起動します。
2. PATH 環境変数に、Oracle Fail Safe Server パスが含まれていることを確認します。(コマンド プロンプトで、PATH と入力してください。Oracle Fail Safe Server パス (<Oracle_Home>%fs%fsvr%bin) が含まれている必要があります。含まれていない場合は、これを追加し、ノードを再起動します。
3. そのリソース・タイプに対する問題のリソース DLL が、<Oracle_Home>%fs%fsvr%bin にインストールされていることを確認します。リソース DLL は、次のとおりです。
 - fsresodbs.dll (Oracle データベース・コンポーネントの場合)リソース DLL がない場合は、Oracle Fail Safe を再インストールして(必要なコンポーネントを選択し)、すべてのクラスタ・ノードを再起動します。
4. Oracle Fail Safe Manager を使用して、クラスタを検証し(「トラブルシューティング」メニューで、「クラスタの検証」をクリック)、それから各クラスタ・ノードを1つずつ再起動します。「クラスタの検証」コマンドにより、Oracle リソース DLL 登録(次の項で説明)が自動的に検証されます。すべてのクラスタ・ノードを再起動する必要がない場合もあります。1つのノードを再起動した後、MSCS クラスタ アドミニストレータでリソース・タイプ名からオースラッシュ記号が削除されているか確認します。オースラッシュ記号がなくなっている場合は、すべてのクラスタ・ノードを再起動する必要はありません。

「クラスタの検証」コマンドによる、Oracle リソース DLL 登録の自動検証

3.0.3 より前のリリースでは、Oracle Fail Safe インストール・プロシージャで、Oracle リソース DLL ファイルが MSCS ソフトウェアに自動的に登録または登録解除されました。ただし、登録で問題が生じた場合は、リソース DLL を手動で登録する必要がありました。Oracle Fail Safe リリース 3.0.3 より、「クラスタの検証」操作でリソース DLL の登録を自動的に行えます。したがって、リソース DLL ファイルが正常に登録されていないというメッセージを受け取った場合は、「クラスタの検証」コマンドを実行して再登録できます。

『Oracle Fail Safe インストール・ガイド』の付録 C に、リソース DLL の説明があります。(この付録では、手動でのリソース DLL の登録および登録解除の方法についても説明がありますが、「クラスタの検証」を使用する方法をお勧めします。)

サイレント・インストールでの大/小文字区別

Oracle Fail Safe のサイレント・インストールでは、大文字と小文字を区別します。コマンドラインの構文を、『Oracle Fail Safe インストール・ガイド』に示されているとおりに入力する必要があります(たとえば、-responseFile パラメータは、F を除いてすべて小文字

を使用して入力します)。ファイル指定も Windows エクスプローラで表示されるとおりに、大文字と小文字を区別して入力する必要があります (たとえば、C:\%Ofs%\Silent_Install\%Ofs\Products.rsp など)。

Oracle Fail Safe クライアントおよびサーバーのリリースの一致

Oracle Fail Safe ソフトウェアのローリング・アップグレードを実行している場合、Oracle Fail Safe Server と Oracle Fail Safe Manager ソフトウェアをクラスタワイドにアップグレードする必要があります。たとえば、Oracle Fail Safe Manager リリース 3.1.2 が稼働しているシステムは、Oracle Fail Safe Server リリース 3.1.2 とのみ機能します。以前のリリースの Oracle Fail Safe Server が稼働しているサーバー・ノードとは機能しません。

Oracle Fail Safe Server のインストール時の Windows NT イベント ビューアの稼働の禁止

Windows NT イベント ビューアを稼働中に、Oracle Fail Safe Server をインストールすると、インストール・プロシージャから、fsus.dll (日本語システムでは fsja.dll) をコピーできないというエラーが返され、再試行するか、無視するか、あるいは取り消すかを尋ねられます。NT のイベント ビューアを停止し、Oracle Fail Safe のエラー・メッセージ・ウィンドウで「再試行」をクリックすると、インストールを続行できます。

第 4 章 Oracle Fail Safe Server

この項では、Oracle Fail Safe Server について説明します。

Oracle Fail Safe Server と Microsoft Cluster Server は異なるアカウントの元で実行可能

クラスタが最初に構成され、Microsoft Cluster Server が最初にインストールされる際、インストールは Windows NT ユーザー・アカウントの元で実行されます。

Oracle Fail Safe Server は (システム・アカウントではなく) 全てのクラスタ・ノードにおいて管理者権限を持つ、ドメイン・ユーザー・アカウントの元で Windows NT サービスとして実行されます。Oracle Fail Safe Server をインストールする際、必要とされる権限を持ったユーザー・アカウントに対する、ユーザー名とパスワードの組合わせを入力するよう促されます。このアカウントは Microsoft Cluster Server をインストールしたアカウントと同じである必要はありません。

IsAlive ポーリングは Oracle Fail Safe Server を実行しているアカウントではなく、Microsoft Cluster Server を実行している Windows NT アカウントを使用して実行されます。

Oracle Fail Safe Server と Microsoft Cluster Server を異なるアカウントの元で実行する場合、ローカルの ORA_DB_A か、全てのクラスタ・ノード上の ORA_<SID>_DBA NT グループに両方のアカウントを加える必要があります。

リソースをグループに追加するときの動作の変更

リリース 3.1.1 より前は、リソースをグループに追加すると、Oracle Fail Safe は常に、最初に構成されるノードにグループを返しました。たとえば、Oracle データベースをグループに追加する場合、「リソースをグループに追加」操作は、常にスタンドアロン・データベースのノードで開始しました。他のノードを構成した後で、「リソースをグループに追加」操作は、データベースを元のノードに戻しました。

この動作は、リリース 3.1.1 では変更されました。リソースがグループに追加された後、グループは、優先ノード・リスト内の最初の使用可能ノードに移動されます。グループの優先ノード・リストが空の場合 (現在のノードが優先所有者ノードであることを示します)、グループは最後に構成されたノードに残ります。

Oracle Fail Safe リリース 2.1.x から Oracle Fail Safe リリース 3.1.2 へのアップグレードで作成される、2 つの Fail Safe Server のリソース (Oracle Fail Safe)

リリース 2.1.x (2.1.2 または 2.1.3) よりリリース 3.1.2 へのアップグレードを行なった場合、クラスタ アドミニストレータより確認すると、Fail Safe Server のリソースが複数存在します (Oracle FailSafe、Oracle Fail Safe)。リリース 2.1.2 およびリリース 2.1.3 において、日本語版のリソース名のみが Oracle FailSafe となっているため、この現象が発生します。

以下の手順で対処を行ってください。

1. 念のため、データベースのバックアップを取得してください。
2. 全てのフェイルセーフ・グループをオフラインにします。
3. 重複しているリソース (両方) をクラスタ アドミニストレータよりオフラインにします。
4. Oracle FailSafe (Fail と Safe の間に空白がない) のリソースをクラスタ アドミニストレータより削除します。
5. Oracle Fail Safe のリソース (削除していない方) をオンラインにします。
6. 2. でオフラインにしたフェイルセーフ・グループをオンラインにします。

リリース 2.0.5、3.0.x および 3.1.1 では日本語版リソース名はリリース 3.1.2 と同様に Oracle Fail Safe (Fail と Safe の間に空白がある) のため、リリース 2.0.5、3.0.x または 3.1.1 からのアップグレードではこの問題は発生しません。

第 5 章 Oracle Fail Safe Manager

この項では、Oracle Fail Safe Manager について説明します。

Windows 2000 で稼働する場合、Oracle Fail Safe Manager ではユーザー名およびパスワードが必要

Windows 2000 の名前付きパイプの問題で、Windows 2000 システムで稼働している Oracle Fail Safe Manager にログインする場合、ユーザー名およびパスワードを入力する必要があります。

他のシステムで稼働している Oracle Fail Safe Manager にログインする場合は、ユーザー・アカウントに適切な権限があれば、ユーザー名およびパスワードを入力する必要はありません。

FSCMD OFFLINERESOURCE コマンドの変更

リリース 3.1.1 より前の Oracle Fail Safe では、ユーザーが FSCMD リソースのデータベース・リソースに/OFFLINE 修飾子を指定しないと、デフォルトの「Normal」が使用されました。リリース 3.1.1 からは、デフォルト値は「Immediate」になりました。

第 6 章 Oracle データベース

この項では、Oracle データベースについて説明します。

Oracle Fail Safe では INTERNAL アカウントのパスワードは不必要

データベース・ユーザーの認証に OS 認証を使用する場合、Oracle Fail Safe ではデータベースの INTERNAL アカウントのパスワード入力を必要としません。しかしデータベースを稼動する全てのクラスタ・ノードで OS 認証によってユーザー認証を行うよう構成されている必要があります。

スタンドアロン Oracle8i データベースの検出

スタンドアロン・データベースを検出するために、Oracle Fail Safe は、クラスタ上の Oracle8i データベースのパラメータを含むデータベース初期化パラメータ・ファイル (init.ora など) を読み込みます。データベース初期化パラメータ・ファイルが置かれている共有ディスクが、スタンドアロン・データベースの所有者ノード上でオンラインになっていないと、Oracle Fail Safe はスタンドアロン・データベースを検出しません。サンプル・データベースが検出されない場合は、適切な共有ディスクが所有者ノード上でオンラインになっていることを確認してください。

Fail Safe Manager で発生する可能性のある Oracle8i データベース・エントリのエラー

Oracle Fail Safe は、データベース初期化パラメータ・ファイル内の SERVICE_NAME パラメータを、tnsnames.ora ファイル内の Net8 ネット・サービス名エントリと照合することによって、Oracle8i データベースを検出します。SERVICE_NAME 値が非常によく似た (たとえば、DB817 と DB8172 など) 2 つのデータベースがあり、一方のデータベースがスタンドアロンで、もう一方がグループに属している場合、Oracle Fail Safe Manager は、誤って両方のデータベースをスタンドアロン・データベースとしてリストすることがあります。

サンプル・データベースの作成

Oracle Fail Safe には「サンプル・データベースの作成」コマンドが用意されており、事前構成済みのサンプル・データベースをユーザーの指定したクラスタ・ディスクにインストールします。サンプル・データベースの機能は限られており、テストおよび Oracle Fail Safe オンラ

イン・チュートリアルでの使用を目的とするものです。本番用データベースとしては使用しないでください。

次の表に、Oracle Fail Safe 3.1.2 に含まれるサンプル・データベースのバージョンと、サンプル・データベースでテストできる Oracle データベースのバージョンを示します。

サンプル・データベースのバージョン	使用するデータベース・バージョン
7.3.4	7.3.4
8.0.5	8.0.6
8.1.5	8.1.5、8.1.6、8.1.7

サンプル・データベース・ファイルは、適切なバージョンの Oracle データベース・サーバーがインストールされているノードにのみインストールできます。たとえば、リリース 8.1.5 がインストールされている場合は、Oracle Fail Safe のインストール時に 8.1.5 用のサンプル・データベースのみインストールされます。

サンプル・データベース作成時の対象バージョン以外のバージョンでのサンプル・データベースの使用には、既知の制限事項があります。8.1.5 のサンプル・データベースが、Oracle データベース・サーバー・リリース 8.1.6 で使用するようにインストールされている場合は、データベースに接続したときに次のエラーが返されます。

ERROR:

```
ORA-06533: PLS-908: 格納された形式 SYS.STANDARD は、このリリースでサポートされません。
```

パッケージ DBMS_APPLICATION_INFO へのアクセス・エラーです。

ERROR:

```
ORA-06533: PLS-908: 格納された形式 SYS.STANDARD は、このリリースでサポートされません。
```

Oracle Fail Safe で提供されているサンプル・データベース機能は、テストにのみ使用します。本番用のデータベースを作成するには、Oracle Database Configuration Assistant を使用するか、データベースを手動で作成します。

アーカイブ・ログのサポート

Oracle8i リリース 8.1.5 以降、ディスクの位置ではなくサービス名でアーカイブ・ログの宛先を定義することができます。

たとえば、次のようになります。

```
log_archive_dest_1='LOCATION=f:¥<dir_name> MANDATORY REOPEN=5'
```

```
log_archive_dest_2='SERVICE=standby OPTIONAL REOPEN=120'
```

この例は、Oracle8i リリース 8.1.5 でアーカイブ・ログ・サポートに可能な標準的なエントリを示しています。

- 最初のエントリは、ファイル・システムの宛先を指定します。Oracle Fail Safe では、この場所を調べて、使用されるディスクがクラスタ・ディスクであり、すべてのクラスタ・ノードからアクセス可能であることを確認します。
- 2 番目のエントリでは、「standby」という TNS サービス名エントリを指定します。Oracle Fail Safe では、すべてのクラスタ・ノード上の tnsnames.ora ファイルを自動的に更新しません。すべてのクラスタ・ノード上の tnsnames.ora ファイルのサービス名エントリを手動で編集または追加する必要があります。

スタンバイ・サポート

Oracle Fail Safe では、1 つのクラスタにプライマリ・スタンバイ・データベースのみ構成することをサポートしています。リカバリ・モードまたは読取り専用モードのいずれかで構成されたりモート・スタンバイ・データベースを、Oracle Fail Safe でクラスタに構成することはできません。スタンドアロン・データベースとして実行してください。

データベース・リスナー・リソースとデータベース・リソースの依存性の変更

Oracle Fail Safe データベース・リソース DLL は、データベースに接続しようとするときに、Net8 (SQL*Net) リスナーを使用します。この接続に失敗した場合、データベース・リソース DLL は、Net8 (SQL*Net) リスナーをバイパスする Net8 (SQL*Net) Bequeath 接続を使用します。したがって、Oracle Fail Safe がデータベースに接続するために、データベースがデータベース・リスナーに依存することはなくなりました。

Net8 (SQL*Net) リスナー・リソースに障害が発生した場合は、リソース再起動ポリシーに基づいて再起動します。データベースとデータベース・リスナー間の依存性が除去されたので、リスナーに障害が発生した場合でもデータベースはオフライン化されません。

listener.log ファイルが肥大化する問題

IsAlive ポーリングによる多量のデータベース接続のために、Oracle Fail Safe リスナーに対する listener.log ファイルは、急速に肥大します。この現象は次の 2 つの方法によって解決できます。

- listener.log ファイルを定期的に削除する。このファイルはリスナーを停止することなく削除することができます。
- listener.ora ファイルで LOGGING_*<listener name>*パラメータを OFF に設定する。ログ機能を停止するリスナーが Oracle Fail Safe リスナーであることを確認してください。

検証操作時に無条件に再起動しないスタンドアロン・データベース・リソース

Oracle Fail Safe は、「スタンドアロン・データベースの検証」操作中にデータベース・インスタンスを自動的に起動および停止することはなくなりました。

データベース・ユーザー名に INTERNAL を使用

OS 認証を使用しない場合、すべての Oracle Fail Safe 操作を成功させるには、データベース・ユーザー名が「INTERNAL」である必要があります。

第 7 章 Oracle Reports

この項では、Oracle Reports について説明します。

一貫性のない NAMES.DEFAULT_DOMAIN パラメータによる Oracle Reports Server での障害の可能性

sqlnet.ora パラメータ NAMES.DEFAULT_DOMAIN の値は、クラスタのすべての Oracle ホームにわたって同一である必要があります。そうでなければ、Oracle Reports Server のリソースに問題が生じる可能性があります。たとえば、Oracle Reports Server をグループに追加する処理が失敗したり、グループに Oracle Reports Server が含まれている場合に「グループの検証」処理で障害が発生する場合があります。

Oracle Reports Server を含むグループの検証時の不適切なメッセージ

Oracle Reports Server を含むグループを検証すると、Oracle Reports Server のサービス名が存在し、それが正しい場合に、次のようなメッセージが表示される可能性があります。

```
FS-10693: Oracle Reports Server エントリ<report-name>は  
<Oracle_Home>\Net80\Admin\Tnsnames.ora ( ノード<node-name> ) に存在しません。
```

デフォルトのポート 9100 で作成しますか?

エラー・メッセージの質問に対する返答にかかわらず、Oracle Reports Server を含むグループを検証するたびに、このメッセージが表示されます。

第 8 章 Oracle Load Balancer Server

この項では、Oracle Load Balancer Server について説明します。

Oracle Load Balancer Server リソースを追加した後の FormsWeb.cfg ファイルの妥当性チェック

Oracle Load Balancer Server リソースをグループに追加した後で、Forms CGI 実行可能ファイルによって使用される、formsweb.cfg ファイル内の MetricServerPort パラメータおよび ServerPort パラメータの妥当性をチェックする必要があります。このファイルは <Oracle_Home>%Forms60%formsweb.cfg にあります。MetricServerPort パラメータの値は、Oracle Load Balancer Server リソースを追加するときに指定した RequestPort 起動パラメータの値と同じである必要があります。ServerPort パラメータの値は、Oracle Forms Server の起動パラメータの値と同じである必要があります。

第 9 章 Oracle HTTP Server

この項では、Oracle HTTP Server について説明します。

ドキュメント・ルート・ディレクトリへのファイルのコピー

「リソースをグループに追加」ウィザードで指定したクラスタ・ディスクの、ドキュメント・ルート・ディレクトリ（たとえば、U:\¥Apache¥htdocs）に、ウィザードの過程で指定したディレクトリ索引ファイルなどの必要なファイルをコピーしてください。Oracle Fail Safe では、これらのファイルのドキュメント・ルート・ディレクトリへのコピーは行いません。

第10章 Oracle MTS Service

この項では、Oracle MTS Service について説明します。

グループへの Oracle MTS の追加操作の失敗

グループへの Oracle MTS Service の追加操作が失敗した場合、Windows レジストリ内の LAST_HOME の値による問題である可能性があります。Oracle MTS Service のグループへの追加を試行し、`¥¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥ALL_HOMES` の LAST_HOME の値がシステム上の最高 Oracle ホーム番号と一致しない場合、グループへの Oracle MTS Service の追加操作は失敗し、次のエラーが返されます。

FS-10778: Oracle MTS Service リソース・プロバイダで、クラスタ・リソース <resource-name>の構成に失敗しました。

FS-10618: NT サービス<service-name>の構成の変更に失敗しました。

0x424: 指定されたサービスはインストールされたサービスとして存在しません。

たとえば、システム上に HOME0、HOME1 および HOME2 が存在するとします。グループへの Oracle MTS Service の追加操作を成功させるには、LAST_HOME の値は2でなくてはなりません。問題を修正するには、ローカル・マシン上で LAST_HOME の値をシステム上の最高 Oracle ホーム番号と一致するよう変更し、「リソースをグループに追加」ウィザードを再実行します。

第 11 章 Oracle Applications 11i Concurrent Manager

この項では、Oracle Applications 11i Concurrent Manager について説明します。

Vision Demonstration Database

Oracle Applications 11i に付属の Vision デモで Oracle Fail Safe を使用することはできません。

第 12 章 ディスク・リソース

Oracle Fail Safe では、EMC GeoSpan ディスクを使用できます。ただし、グループへのリソースの追加時、リソースで使用される EMC GeoSpan ディスクがそのグループにない場合、Oracle Fail Safe では FS-10202 エラーが返され、処理がロールバックされます。

このエラーが発生した場合は、リソースに必要な EMC GeoSpan ディスクが含まれているグループにリソースを追加します。

第 13 章 クライアントとアプリケーション

この項では、クライアントおよび可用性の高められたリソースにアクセスするアプリケーションについて説明します。

Oracle Server 8.1.6 の透過的アプリケーション・フェイルオーバーでの問題

TNS サービス名の `FAILOVER_MODE` で `RETRIES` および `DELAY` パラメータを指定して Oracle Server 8.1.6 の透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) 機能を使用している場合、SELECT 処理でフェイルオーバーが起こると、問題が発生します。データベースのフェイルオーバー後、1 行がフェッチされず、データのかわりに空白行が結果表に挿入されます。

Oracle Server 8.1.6 のこの問題は、不具合 (1222904) としてレポートされています。この問題の解決策に関する情報を参照するか、Oracle Server 8.1.6 パッチで修正版が使用可能になるまでお待ちください。

Oracle8 OCI TAF 機能と 8.0.5.2 以前のリリースの Oracle

Oracle8 OCI 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) 機能は、Oracle データベース・リリース 7.3.4 のフェイルバック中は正しく動作しないことがあります。クライアントとアプリケーションは最初のフェイルオーバー後に自動的に再接続しますが、フェイルバック後に別のノードに自動的に再接続しないことがあります。この問題は、Oracle 8.0.6、8.1.5、8.1.6 および 8.1.7 のデータベース・リリースで修正されています。

第 14 章 Oracle Enterprise Manager との統合

この項では、Oracle Fail Safe と Oracle Enterprise Manager の統合について説明します。

Oracle Intelligent Agent 8.1.7 での仮想ホストの検出

Oracle Intelligent Agent 8.1.7 を使用して Oracle Fail Safe 仮想ホストを検出するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager で、「ノード」を右クリックします。
2. 「ノードの検出」を選択します。
3. ドメイン名を指定せずに仮想ホスト名を入力します。

ドメイン名を指定して仮想ホスト名を入力すると、エラーが返されます。この制限は、仮想ホストを初めて検出するときのみ適用されます。2 回目以降は、ドメイン名を指定するかどうかにかかわらず、仮想ホスト名を入力するとどちらも検出されます。

サポートされる Oracle Intelligent Agent

Oracle Fail Safe 3.1.2 は、Oracle Intelligent Agent リリース 8.1.7 のみサポートします。Oracle Intelligent Agent リリース 8.1.7 は、Oracle Fail Safe 3.1.2 がサポートするすべての Oracle データベース・バージョンをサポートし、Oracle Intelligent Agent リリース 8.1.5 および 8.1.6 の制限事項のいくつかに対処しています。

Oracle Intelligent Agent リリース 8.1.7 は、Oracle 8.1.7 データベースとともに使用することも、Oracle 8.1.7 CD Pack のスタンドアロン製品として使用することもできます。すべての 8.1.7 製品と同様に、Oracle Intelligent Agent は、他の 8.1.7 製品のみ含む Oracle ホームまたは独自の Oracle ホームにインストールできます。

エージェントのリソースを Fail Safe グループに追加するときは、8.1.7 のホームからエージェントを選択します。

JobOut サブディレクトリの部分的サポート

Oracle Intelligent Agent リリース 8.1.7 は、ジョブ出力ファイルを JobOut というディレクトリに置きます。高可用性エージェントの場合、JobOut ディレクトリは、クラスタ・ディスク上のエージェントの ConfigPath ディレクトリ下にあるサブディレクトリです。エージェントは、ジョブを実行するために JobOut サブディレクトリを必要とします。

エージェントを作成し、グループに追加すると、Oracle Fail Safe 3.1.2 はクラスタ・ディスク上に JobOut サブディレクトリを作成します。ただし、高可用性エージェントが属するグループを検証するときに、Oracle Fail Safe 3.1.2 は、JobOut サブディレクトリが存在するかどうかを検証しません。また、高可用性エージェントのクラスタ・ディスクを変更したときに、Oracle Fail Safe 3.1.2 は、新規ディスクに JobOut サブディレクトリを作成せず、旧ディスク上の JobOut サブディレクトリも削除しません。

物理ノード上でスタンドアロン・データベースとして検出されるフェイルセーフ・データベース

物理ノード上でスタンドアロン・データベースを表示すると、物理ノード上でオンラインになっているフェイルセーフ・データベースが検出されていることがあります。この問題は、Windows NT 4.0 Service Pack 3、5 または 6a で稼働しているシステムで発生します。

グループにエージェント・リソースがある場合、そのグループ内のデータベースは、物理ノードで検出されません。このケースの例外は、データベースが複数の仮想アドレスを使用している場合です。データベースの listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルで使用されている最初の仮想アドレスが、エージェントで使用するよう選択されていない場合、グループ内のデータベースは物理ノードで検出されます。

Fail Safe によって再起動されない物理ノードのデフォルト・エージェント

リリース 3.1 より前の Oracle Fail Safe では、物理ノードのデフォルト・エージェントは、サンプル・データベースの作成、サンプル・データベースの削除、グループへのデータベースの追加、グループからのデータベースの削除の各操作時に再起動しました。Oracle Fail Safe 3.1 では、物理ノードのデフォルト・エージェントは自動的に再起動しなくなりました。物理ノードにある更新済データベース・リストが必要な場合は、デフォルト・エージェントを手動で再起動する必要があります。

第 15 章 マニュアルのエラー

この項では、Oracle Fail Safe マニュアル・セットのエラーを訂正します。

Oracle Fail Safe 概要および管理ガイド

- リリース 3.1.1 および 3.1.2 の「Oracle Fail Safe 概要および管理ガイド」では、Oracle Fail Safe は Oracle Forms Server 6i での動的 HTML の使用をサポートしていないとありますが、これは誤りです。Oracle Fail Safe は Oracle Forms Server 6i での静的および動的 HTML の使用をサポートしています。
- 「Oracle Fail Safe 概要および管理ガイド」の 7.11.1 項において、エラー処理スクリプトは次のガイドラインに従って呼ばれるとあります。

```
FsDbError.bat <error code> <TNS service name> <SID> <parameterfile spec>
```

これは誤りです。エラー処理スクリプトは次のガイドラインに従って呼ばれなければなりません。

```
FsDbError.bat <error code> <database name> <SID> <TNS service name>  
<parameter file spec>
```

Oracle Fail Safe クイック・ツアー

- Oracle Fail Safe クイック・ツアーの「グループと仮想アドレス」と題名付けられたレッスンの 4 ページ目において、Oracle Fail Safe がデータベースと Net8 (SQL*Net) リスナーの間に依存性を作成することを示す、不適切な画像が使用されています。リリース 3.1 からは、Oracle Fail Safe がデータベースと Net8 (SQL*Net) リスナーの間に依存性を作成することはありません。

第 16 章 廃止された機能

この項では、Oracle Fail Safe の廃止された機能について説明します。

- Oracle Fail Safe リリース 2.1.2 および 2.1.3 で使用可能な「グループの移行」コマンドは、リリース 3.0.3 からは使用できなくなりました。
- GR_MIGRATE トレース・フラグ（移行操作を使用するときにトレース情報をキャプチャするフラグ）は廃止されました。
- Microsoft Internet Information Server（IIS）の可用性を高めるためのウィザードは提供されなくなりました。Microsoft クラスタ アドミニストレータを使用して IIS を構成してください。
- 「イベント状態の表示」コマンドは提供されなくなりました。かわりに Windows イベント・ビューアを使用してください。

第17章 修正されたソフトウェアの問題

修正されたソフトウェアの問題は次にリストされています。

- ある条件下において「グループの検証」コマンドが誤ったエラーを返していた問題が修正されました。
- インストール中の Security Setup において Windows NT アカウントのユーザー名とパスワードを入力する場面があります。Oracle Fail Safe の以前のリリースでは、ユーザー・アカウントが所属する Windows NT グループが多すぎると、ユーザー・アカウントを検証する操作に失敗していましたが、この問題は修正されました。